

野 解体 至書



1.

(わたし……なにしてるんだろう……?)

はあはあと、激しく息が乱れていた。

(ここ……どこ……?)

頭の中はくちゃぐちゃで、もやがかかった様になっていた。

「あの……お支払い方法は？」

「えっ!? あ、はい……えっと……あ、あれ? 財布……」

ばくばくと、はち切れそうな程に心臓が脈動していた。

「あつ、す、すみません……その中に全部入れちゃったみたいで——」

(そう……だ……おじさまの指示でコンビニのトイレに入って……)

ふと視線を落とすと自身の裸体が——いや、裸体と呼ぶには淫らすぎる無様な肉の果実が視界に飛び込んでくる。

(トイレに『用意されていた』箱の中身に『着替えて』……脱いだ服を箱に入れて、『それ』の発送手続きを……)

慎重しやかながらも年相応の胸の膨らみは、興味本位で購入したニッブルローターに責め立てられている。太腿のキャットガーターに挟んだ大量のコントロールからは幾本ものケーブルが伸びていて、ローターが胎内をガチガチとぶつかり合いながら揺らしていた。その上、歪に膨らむお腹の中には、更なる刺激を求めて購入したロングゲイルドが無理矢理にねじ込まれていた。

「あー、ええっと……キャッシュレス、使えますよ?」

「あ、じゃあ、Can Pay♪——」

それらが勝手に出てこないよう念のために装着した多機能バイブレーターは、クリトリスを吸引しながら先端を磨き続ける。多機能の名に恥

じぬそのアイテムは、G スポットを叩き上げてローターを子宮口に押し付け、下腹部から低周波で子宮を刺激し、同時に挿入されているアナールフックと共に肛門を押し広げながら骨盤底筋を責め立てる。

そんな刺激に耐えながら、彼女は決済アプリを立ち上げたが顔認証に失敗しストップしてしまった。

(え……? あ、マスク? 外さないと? ま、マスクしか着てないのに?)

マスクは衣類ではない。そんな常識すらも、今の彼女からは吹き飛んでしまっている。

今、コンビニで、レジの前に立つて無数の淫具に飾り付けられた裸を晒している少女は、唯一身に着けている衣類を脱げと言われているような、こんでもない決断を迫られている気持ちになって、ただでさえぐちゃぐちゃになっている頭の中を更にかき回されているような気分だった。

「……大丈夫ですか?」

「だつ、大丈夫……です!」

最初はドン引き状態だった店員も、さすがに事件性があるのではないかと心配そうな声を出す。しかし、少女はそんな店員の思いなど考える余地もなく、勢い良くマスクをずらした。

瞬間、新鮮な空気が鼻腔いっぱいに広がり、肺に取り込まれて、火照った身体の体温を僅かに下げる。

(顔も……はだかに……気持ちいい……)

——カーン・カーン・カーン——

異常なほど静まりかえったコンビニに、大音量と錯覚するほどの決済音が鳴り響いた気がした。

——那珂ちゃんチャンス!——

その上、やたらと楽しげな声でルーレットまで始まってしまおう。

「荷物、よろしくお願いします！　そ、それじゃ！」

「あ！　お客さん！」

「へっ？　ひゃい!?」

「こちら、お控えです」

「あ、あああ…あはは、ありがとうございまひゅー！」

一瞬にして素に戻った少女は、逃げるようにこコンビニから飛び出していく。

——三等賞！　やったね——

そのまま反対車線のビルまで全速力で走って行って、へなへなし壁際にへたり込んでしまった。

（身体……熱くて……頭の中まっ白で……）

身体芯でタービンが唸りを上げているかのように全身が火照っている。

頭の中はもやがかかったようにぼんやりとして、はつきりと思考を結ぶことが出来ない。

（汗……いっぱいいかちゃった……）

額から滲んだ汗が頬を伝い、マスクから滲み出た涎と混じり合っただり、ぼたりと落ちていった。

（あ……でも、風……気持ちいい……）

季節は春先。随分と暖かくなったとはいえ、夜はまだまだ肌寒さを感じる。それなのに少女は全身にびっしょりと汗をかき、頬を、耳を、首すじを、そして身体全体を薄ピンク色に染めている。

（そうだ……發送証明の自撮り……）

そこではたと気がついた彼女は伝票の控えを口に挟み、手にしていた

スマホのインカメラで自撮りした。

『着替えて脱いだ服は發送できました』

短いメッセージを添えてその写真を送信し、返事を待つが既読は付かない。

（待ち合わせ時間……間に合わなくなる……行かないや……）

立ち上がり、歩き始めた少女の身体を、路地を渡っていく風が優しく撫でていった。

（もつと……んっ……もつと……風……吹いて……）

じりじりと、痺れるほどに敏感になった彼女の素肌は、その感触にすらぞくぞくと快感を覚えてしまった。

（ん……歩き……にくい……）

前に進むもうとしているだけなのに、何故だか身体ゆらゆらとしてしまう。頭がぼんやりとしているというのもあるけれど、それよりもなによりも足下がおぼつかない。

（ハイ……ヒール……?）

ふと足下に目を落として、少女は小首を傾げた。

（ああ……そうだ……そうだった……）

履き慣れない靴のせいで、こんな風にふらついてしまったのは一回や二回ではない。それでも何とか転倒せずにいられるのは、熟練艦娘としての鍛え上げた身体能力のおかげだろうか。

（夕雲さん、すごいなあ……）

先日、司令のエスコートでパーティーに出席することになった夕雲が真っ赤なハイヒールを履いていてそれがとても格好良く見えたものだけど、いざ履いてみるとこんなにも歩きにくいものだったのかとしみじみ実感した。



(ええと、そうじゃなくて……)

駄目だ。やつぱり、思考がまとまらない。

何かを考えようとしてもすぐに拡散してしまい、どうでもいいことばかりが頭に浮かんでくる。

(そう、待ち合わせ……)

本来のミッシヨン《もくてき》を思い出し、ふらつく身体のバランスを取りながら急ぎ足で進む。足を前に出す度にびっくりするほどの足音が立ってしまっけれど、それを気にしているだけの心の余裕はない。

(あとは、この先の繁華街を抜ければ——)

これから自分が通るルートを一瞬思考したとき、ふと、引つかりを覚えた。

(え？ はん……かがい……?)

——メッセージが届いたよっ！

「ひっ!」

思考を遮る不意打ちの着信音に驚かされながら、届いたメッセージに目を通す。

——ちゃんと荷物の発送できて偉いね。

それにしても驚いたよ。箱の下段に入れておいた衣装を着てないっていうことは、そんな物はいらないうことだよな?

合流できたらたっぷりご褒美をあげるよ。

ただし、待ち合わせの時間を過ぎたら帰るからね? 遅刻しないように

(……え? 衣装? 箱の下段? に、二重底!?)

本来であれば何かしらの衣類を『身に着けられていたはずだった』事実を知らされ、呆然と立ちすくむ少女。

(と、取りに戻って……ううん、それだと待ち合わせに間に合わない……)

戻るべきか、進むべきか。その場で何度も方向転換を繰り返し、迷った末に決断をした少女は、繁華街の路地を一本入った筋へと思い切った歩みを進める。

事実を知らなければ、もう少しマシだったかもしれない。

だけど、知ってしまった今となっては自分の行いの浅はかさを呪ってしまう。

「え! な、なんだ!」

そんな彼女が進んでいるのは繁華街の路地を一本入った筋。表通りに比べれば道行く人は少ないが、それなりの人通りはある。灯りが少なく薄暗い故に、間近に近づくまでは気がつかれることはなかったが、それは逆に少女の姿が突然闇の中から現れたかのように見えてしまった。

「きゃ……っ!」

驚いた様にびくりと身体を震わせ、足を止め、振り返りつつひそひそと言葉を漏らす。

「ちよつと、やめなさいよ」

「いや、でも……」

「またネットにアップする気でしょう? 炎上は懲りたんじゃなかったの?」

「あ、うん……そう、だな」

中には慌ててスマホを取り出し写真を撮ろうとするものもいたが、暗がりであることと思いのほか少女の足が早いこと、そしてなによりもあ

まりに現実離れしていることから、幸いにもその姿を撮影されることはなかった。

「なんだあれ、なんかの撮影か……？」

「ヤバイやつなんじゃないの？ 警察に通報した方がいいのかな……？」

ほっそりとした小柄な裸身。若干凹凸には欠けるがすらりと均整のとれた肢体。思わず見とれてしまうような珠の素肌は汗に濡れ、上気して赤く染まり、ひびく艶やかで。

一言で表現しようのない蠱惑的で倒錯的なエロスを醸し出すその背中を、目撃者たちはただ見送って――

再び少女の裸身は闇に溶けていくのだった。

§

きつかけは、なんてないことだった。

「ねえねえのわっち、これ見て！ これ！」

舞風が少々興奮気味に見せてくれたもの。

「すごい……かっこいい……」

「でしょ？ でしょでしょ？」

それはとある動画投稿サイトの、いわゆる『踊ってみた』動画。

スマホの小さな画面の中では、自分と同じ年頃と思われる少女が、にこやかな笑顔で華麗なダンスを披露していた。激しく、リズムミカルに、

そして何よりひとつひとつの動作がビシッと決まっているその様子は、ダンスに明るくない野分が見ても『とてもレベルの高い』ものだと思いで分かるものだった。

「これだけじゃないんだよ。この子、他にもこんな感じの動画アップしてるの」

「そうなんだ……これって、私のスマートフォンでも見られるのかな？」

「勿論！ えつとね、ここをタップして、次、ここをタップ……」

「ええつと……覚えられるかな」

「簡単だよ、のわっちならすぐ覚えちゃうって」

連絡・情報収集用としてスマートフォンは支給されているが、野分は今までそれを活用したことは殆どない。舞風のように本来の目的だけでなく私用の、遊興のためにも利用している艦娘は存在していて、セキュリティやコンプライアンスの点から少なからず問題になっている。しかし、彼女に限ってはむしろ『もう少し活用した方がよいのでは？』と心配になるくらいであり、その懸念はある意味でとても正しく、本質をついたものでもあった。

「へえ……動画って、こんなに沢山アップしてる人がいるんだ……」

「えつとね、オススメはこれと、これと、これ。あ、これものわっち好きかも」

「う、うん……見てみるね」

ネットの海は、野分のような使い慣れていない者にとってまさしく宝の山。アクセスする情報のひとつひとつが新鮮で、刺激的で、魅惑的で、気がつけば彼女はすっかり、ネット動画の虜になってしまっていた。

「のわっち、大丈夫……？」

「え？ なにか？」

「えっと、その……目が赤いよ？」

「え……っ？ そうかな？」

その結果野分が陥ったのは、睡眠不足。

「あんまり夜更かししちゃだめだよ？」

「う、うん。ごめん、ありがとう。気をつけるね」

それを敏感に感じ取った舞風ではあったが、自分が薦めた手前あまり強く言うことも出来ず、やんわりとした注意をするばかり。そして野分もまた、『舞風に注意されてしまった』という罪悪感を感じつつも、その強い探求心と研究心、好奇心に突き動かされて、新しい動画を発見し、時間を忘れて見入ってしまうという悪習から脱することが出来なかった。

——そんな、ある日のことだ。

いつものように日常の訓練・業務を終え、食事や入浴なども済ませた就寝前の余暇の時間。野分は今日もベッドに潜り込んでスマホの画面を見つめる。同室の舞風の迷惑になつてはいけなさと始めた動画の視聴方法であったが、それは同時に彼女に『イケナイコトをしている』というある種の麻薬めいた楽しさ——今まで感じたことのないような、ドキドキとワクワクを感じさせていた。

「えっ……？ こんなことしちゃうの……？」

野分が今、熱心に眺めているのはただの『踊ってみた』動画ではない。最初はそういった『健全な』コンテンツだけを消費していたが、今はすっかり深みにハマってしまったている。

そう、彼女は気がつけば『踊ってみた』動画の少女の裏アカにたどり着き、その『不健全な』ダンスに虜になってしまっていた。

「ふ、服……脱いじやった……」

動画に映る少女は相も変わらず華麗なダンスを披露している。ただ、異質なのはその姿。ほとんど裸と言つていい、あられもない姿。そんな状態で彼女は身体を大きく反らし、足を高々と上げ、弾ける様な笑顔を、羞恥に——いや、悦びに赤く染めている。

「み、見えちゃう……見えちゃうよそんなの……」

見せつけているのだ。豊かな乳房や引き締まったお尻、長くすらりとした脚。そして、秘密の花園——見せては行けない場所をむしろ強調するように、足を開き、腰を振り、指先でくばつと押し拡げて。

よく見ればそこはキラキラと雫に輝いていた。それは汗ではなく、汗よりも若干粘りのある、とろりとした液体——少女の秘芯から溢れ出る悦楽の蜜だとわかった。

ぐくりと喉が鳴った。見てはいけないものだと思いつつ、目を離すことが出来なかった。毛布を被った身体が、顔が熱くて、額には汗が滲んでいた。

そして、その動画が終わったら次の動画。それも終わったら更に次の動画。

指は自動的に動き、スマートフォンのモニターをタップしていく。

その野分の指の動きに合わせて、動画の少女の行為はどんどんとエスカレートし、その鮮烈さで彼女の脳を灼いていく。

見るからに大きい、凶悪な形をした道具を小さな秘芯に突き入れ、激しく自慰をしたかと思えば、一条纏わぬ姿で夜の街を徘徊し、まるで犬のマーキングのように小水を路地にまき散らし、楽しげに踊り、歌い、素肌の乳房や下腹部を強調するかの様な革の拘束具を着て、画面の向こう側にいる不特定多数の視聴者に媚びるような笑みを浮かべ——

これは、見てはいけないものだ。

野分の中の理性が、危険信号を発していた。

こんなものを見ていたら自分までおかしくなってしまうと、強く、強く訴えていた。

だが、それと同時に感じる、自分でもよく分からない感情。

胸がどきんつ、どきんつと激しく脈動して、息が荒く、浅くなり、目の奥がつーんと痛くなる感覚。

未だかつて感じたことがないような——そう、興奮。

私も……こんなこと、してみたい……。

それはどこからわき起こったのかわからない欲望。

今まで真面目に、堅物だと言われながらも真っ直ぐに進んできた少女の中の奥の奥、自分ですら認識できない深層心理の底に浮き上がった小さな澱み。

いけない。こんなことをしてはいけない。

未だ、頭の中では警報が鳴り響いていた。

どうにか自分自身を正気に戻そうと、決死の叫びを続けていた。

だけど、彼女の指は、彼女の意味に反するかのようにゆっくりと動いて——

『私も、こんなこと、してみたい……』

「か、書き込んだじゃった……」

そこで野分ははつと我に返る。

「け、消さなきゃ……」

慌てて、自分自身の『気の迷い』を削除しようとする。

だが——

「あ、あれ……？ 消すのつて、どうしたらいいの……？」

不慣れた野分にはどうすればコメントを消せるのかわからない。

「どうしよう……こんな舞風には聞けないし……」

気持ち焦り、より一層訳がわからなくなってしまう。

「え、えつと、ど、どうすれば……」

そうして、彼女の混乱、困惑がピークに達した時——

「きゃっ!？」

絶妙なタイミングで、マナーモードにしてあった野分のスマートフォンがぶるぶると強く振動した。

「え……？ な、なに……？」

それは、メッセージアプリの着信。

広く艦娘たち——そして世の少女たち——に使われているもので、舞風に勧められるままにインストールこそしたものの、ほとんど使っていないものだ。

「誰……？」

差出人の名前は『P』

野分には全く覚えのない名前。

こういう時、迂闊にメッセージに返信しないというのはリテラシーの基本中の基本。それこそ、研修で嫌というほどに聞かされている。普通であれば、野分は中を読むまでもなく削除していただろう。

だけど、何故かこの日に限って、ひどく中身が気になった。

自分の後ろめたい部分を刺激された気持ちになって、読まなければいけない気になってしまった。

「……」

悩んだ時間はほんの数秒。いや、もしかしたら数分だったかもしれない。

短いのだか長いのだかわからない時間、彼女は理性と好奇心の狭間で逡巡し、そして――

『随分熱心に見ているようですが、ご興味おありですか？』

目に入ったメッセージに、野分は思わず起き上がった。そしてスマホを胸に抱いてきよきよと当たりを見回す。

「どうしたの？ のわっち？」

「え？ あ、う、ううん。なんでもない」

丁度部屋に入ってきたところだったルームメイトの舞風と目が合い、不思議そうな顔をされて、ぶんぶんと首を横に振った。

「そう？ だったらいいんだけど。じゃ、おやすみー」

「う、うん。おやすみ」

野分の様子に一瞬訝しげな表情を浮かべた舞風だったけれど、もう眠いのだろう、ふあっとひとつ小さなあくびをすると、ごそごそとベッド

に潜り込む。

「……すう」

そして、ほんの数秒も立たずに聞こえてくる穏やかな寝息。

舞風の寝付きがいいことはよく知っていたけれど、それでもきちんと彼女が眠りの世界に沈み込んでいったことを確認出来ないと、野分は不安でたまらなかった。

そんな風にしてどれくらいの時間が過ぎただろう。

それは、5分くらいだったかもしれないし、60分くらいだったかもしれない。

ともかく、どきどきしている心臓をなんとか押さえ込みながらしばらくの間息を詰めて――

もう、大丈夫だろう。

その確信を得てから、野分は改めてスマホの画面に目を落とす。

『随分熱心に見ているようですが、ご興味おありですか？』

同じだ。

先ほど確認したメッセージと一字一句変わらない文章。

『この人は誰だろう？』

まず、思ったのはそのことだった。

『どうして、熱心に見ているだなんてわかるんだろう？』

そして、次に思ったのはこのこと。

管理者権限があれば、どの動画を誰がどのくらいの時間見ているかなんて簡単にわかることだが、知識に乏しい野分にはそんなこと想像もつかない。

だが、どうして自分のメッセージのアドレスがわかったんだろうとは考えなかった。

これは、コメントを書き込んだときにご丁寧にアドレスを明記していただけた話なのだが、もはや、今の野分はそこまで考えが及ばない状態になってしまっていた。言ってしまうばもう、その時点で『吞まれて』しまっていたのだ。返事は返すべきではない。そんな常識は吹き飛んでしまっていた。むしろ、返信をしないと何か大変なことが起こってしまったような、そんな気持ちになってしまっていた。

だから、野分は――

『興味は……あります。少しだけ……ですけど』

震える手でメッセージを入力する。

そして一瞬間した後、送信ボタンを押す。

「きゃ……っ！」

返事はすぐに届いた。

体感では数秒――流石にそんなわけはないのだが――で返ってきたように思えた。

『私なら何かお手伝いできますよ?』

怪しい。いかにも怪しい。

リテラシー研修を仮に受けていなかったとしても、普通であるならばそれ以上やりとりを続けようとは思わないメッセージ。

だが、野分は――

強烈な視覚情報に脳を灼かれた少女は、そんな『真つ当な』感覚の全てが吹き飛んでしまっていて――

そこから、彼女と『おじさま』の奇妙なやりとりが始まった。

§

メッセージの相手は自分のことを、『プロデューサー』だと名乗った。『自分の欲望をさらけ出せない少女のために、色々とアドバイスをしている』ことをそう表現しているようだ。

ならば相手のことは『プロデューサー』と呼ばばいいのかと野分は思ったのだが、それは少々照れくさいそうで、『おじさん』でいいと言う。だけど、それだとやはり相手に失礼なように感じてしまったので、野分は『おじさま』と呼ぶことにした。

「ははは、一度は呼ばれてみたいと思っていましたが、実際にそうしてみると中々照れくさいんですね」

最初は警戒していた野分ではあったが、優しく、丁寧で、親しみやすく、可愛げのある軽口を飛ばす『おじさま』に、彼女の中に僅かに残っていた疑念はあっという間に溶けていった。

「何か、日常でつらいことがあったのですか？」

「別に……そういう訳じゃないんですけど……」

彼曰く、こういったことに興味を抱く少女は、その多くが生きていく上での困難に晒されているらしい。しかし、野分にそういった何かは存在せず、特に不自由や苦痛を感じている訳ではなかった。

ただ――

「ただ？」

「その、上手く言えないんですけど……えっと、私、周りにはいつも真面目だ真面目だって言われてて、でも、別に本当は真面目って言うわけではなくて、ただ頭が硬くて特別な趣味や特技のないつまらない子で……」

不思議と『おじさま』には、誰にも言っていない心の思いを吐露することが出来た。会ったこともなくせに――何度かのメッセージのやりとりと今の音声通話だけだ――何故だかこの人は信頼していい人だと感じてしまっていた。

「そうしたら、動画を見つけたんです。友達に教えて貰ったんですけど……最初は『踊ってみた』っていうのを。あれを見て凄いなあって思ったし、楽しそうな顔をしているなあとも思っ、そうしたらもともととあの人のことを知りたくなって……」

「彼女の自慰動画を見つけた？」

「は、はい……」

あけすけに『自慰』なんて言葉を使われて、かあつと顔が熱くなる。

「不躰ですがのあさんは自慰をしたことは？」

「あ、あります、け、ど……」

ちなみに野分はネット上では「のあ」と名乗っている。ネットを使う

上で気をつけるべきことを色々と逸脱してしまっている彼女ではあったけれど、最低限、本名は隠すべきであるという点だけは守っていた。

「ありますけど、どうしました？」

「その……私、寮に入っているの、相部屋で、同室の子がいて……だから……えっと、その子がいなくてさだけしか……」

当然だが、自分が『艦娘』だということは語っていない。それは機密中の機密で、自分だけでなく他の子たち、ひいては司令にも大きな迷惑をかけてしまうことは理解している。

「今、こうやって私と通話しているのは大丈夫なんですか？」

「はい、それは、ランニングに行ってくるって外に……」

「なるほど」

日中は何かと賑やかで喧しい鎮守府だが、夜ともなれば静まりかえり、灯りも少なく薄暗い。

「海の近くなのですか？」

「あ、はい……そうです」

波の音だけが聞こえる海辺のベンチに腰かけて、野分はその必要もないのに声を潜めて『おじさま』と電話越しの会話をしていた。

「ふむ……では、そこで試みてはどうでしょう？」

「ふえ？」

なんだか妙に可愛らしい、間の抜けた声が出てしまう。

「するって……何を……？」

言葉の意味がわからなくて問い返してしまう。

「自慰ですよ」

「ほあ？」

もう一度、今度は少し違う、だけどやはり可愛らしい、間の抜けた声。

「えっ!？」

そして、大きな声が出た。思わず飛び上がった、素っ頓狂な声を出してしまった。

「なっ! なな……っ……なななっ……!」

「人はいないのでしょうか？」

「い、いな、いないですけどっ!」

「海の近くということは、多少声を出してもわからないでしょう」

「そっ、そそっ、そそそれはっ……!」

かあつと顔が熱くなる。あわわわつと口が上手く動いてくれない。

「普段はどんな風にオナニーをしているんですか？」

「えっ!?! ええっ!?! ええええっ!?!」

半ばパニック状態の野分に『おじさま』は今までと少しも変わらず、優しく、穏やかで、静かな口調で語りかける。

「今はどんな服を着ているのですか？」

「ジャっ……ジャージです」

「ふむ、それじゃあまず、上着のチャックを下ろして」

「あ、あうっ、あうっ……」

その声は混乱し訳が解らなくなっている野分の頭の芯に直接響き渡るような、逆らい難い声だった。

「ほら、落ちついて。大丈夫。周りには誰もいません」

「あ、あの、あの……」

「ゆっくりとでいいんです」

「あ……ああ……は……い……」

駄目だ。逆らえない。そんなこと出来るわけがないって思っているのに、指は自分の石に反してジャージのジッパーを摘まむ。

「深呼吸して。ゆっくり……ゆっくり……」

「は……ふ……ふあ……あ……」

「吸って……」

「すう……」

「吐いて……」

「はあ……」

「ほら、もう、下げられますね」

「は、はい……はい……っ……」

頭の中がじいじいんと痺れる。

目の前がチカチカする。

「ゆっくり……ゆっくり……」

何が何だかわからないけれど、指はジッパーを摘まんだまま下に動いていく。

「ジャージの下はTシャツかな？」

「は、はい……T……シャツ、です……」

「それじゃあそれをゆっくりとめくり上げて」

「あ、だ、駄目……だめえ……」

逆らえない。止められない。駄目だとわかっているのに、とんでもないことだとわかっているのに、野分はシャツの裾を握りしめた手をふるふると震わせて、そして――

「あ……ああ……ああ……」

「胸が露出しましたね？」

「は、い……だ、出しちゃいました……」

「どんな気持ちですか？」

「は……ずか……しい……です……」

「誰も見ていないのに？」

「だ、だって……だって、外で、こんな……」

「ふふ、のあさんは恥ずかしがり屋さんですね」

「だって……だってえ……」

どくんつ、どくんつと心臓が脈打っていた。

はふつ、はふつと息が乱れていた。

熱い。全身が熱い。視界がぐるぐる回る。恥ずかしくて気絶してしま

いそうで、胸が、胸が痛いほどに高鳴って――

「まあ、今日はこのくらいにしておきましょうか」

「え……？」

突然の終了宣告に、ほっとした野分がいた。

「こういうのは順を追っていかないといけませんね」

でも、同時に――

信じられないことに――

――少し、残念に思っている自分もいた。

服を戻してもなお、恥ずかしいという思いはなくならない。

誰かに見られていたんじゃないだろうか、恐怖も収まらない。

だけど、それ以上に。

(な……に……？　これ……なに……？)

頭の奥が痺れている。

お腹の奥がきゅううんつとしている。

背筋がぞわぞわとして、熱くて、甘くて、少しくすぐったくて、そし

て――

「ああ、そうだ。最後に一枚、自撮りを頂けませんか？」

「えっ!？」

当然ながら躊躇はあった。多少のやりとりはしたとはいえ見知らぬ人物に、自分の裸体を晒すことに警戒心を抱くのは当然のことだった。

「顔は写さなくていいですよ。貴方の身体を……素肌を是非見せていた

だきたいだけです」

しかし、そういう風に言われると『顔はいいんだ』と安心してしま

野分がいた。

「えつと……そ、それじゃあ、か、身体……だけなら……」

そして、彼女は。

熱に浮かされた様に全身を熱く火照らせながら、露わになった自分の

胸からお腹のあたりを撮影する。

「ああ、思った通りだ。とても綺麗な身体をしている。小振りだけど

でも素敵な乳房です」

「そんな……こと……」

その写真を送ったことで、心理的な抵抗感が吹き飛んでしまったこと

に、少女はまだ気づいてはいなかった。

S

――そして、今だ。

一度会ってみようと言う話になった野分に、『おじさま』はちよつと

したゲームを呼びかけてきた。その結果、彼女は夜の街を裸よりも恥ずかしい格好で駆け抜ける羽目になり――

「やあ、君がのあさんだね。思っていたよりも大胆で、私も少し驚いたよ」

指定された場所で、『おじさま』との対面を果たしたのだった。

『おじさま』の車に乗せられて、野分が案内されたのは街の郊外にある所謂タワーマンション。二重のセキュリティを通過し、本当に動いているのか不安になってしまう程に静かなエレベーターに乗ってやってきた三二階の一室だった。

「どうぞ」

レディファーストですよ、とばかりに玄関の扉を開けてくれる『おじさま』。

「あ……」

だが、そんな彼の行動に、野分は躊躇してしまう。

「どうしました？」

「あ、えと……」

「安心してください、部屋に入った途端豹変したりはしませんから」

そう言われても、素直に『はい』とはいかない。いや、ここで躊躇《ためら》うくらいならそもそも今までの全ての行動をとるべきではなかったわけだが、こういう状態になってようやく我に返るというのもまた、人間の心理というものだろう。

「それとも、やはりやめておきますか？ 私としては残念ですが、無理強いするつもりはありません。どこか都合のいいところまでお送りしましょう」

しかし、『おじさま』の行動はどこまでも紳士的だった。ここに来て戸惑いの色を浮かべる野分に不満や苛立ちを浮かべることもなく、優しげに、そして少し寂しげに微笑んでみせた。

「い、いえ、その……大丈夫……です」

そんな彼の態度は、野分にとって信頼に値するものと思えた。そしてそれ以上に、これからの行為に対する好奇心は警戒心を塗りつぶすほどに強かった。

「お邪魔、します……」

おずおずと部屋の中に一步を踏み入れる。それと同時に扉が閉まり、がちゃん、と鍵が閉まる音。

（ああ……もう逃げられない）

それは恐ろしい場所に足を踏み入ってしまったという後悔と同時に、じいんと頭の芯が痺れるような何とも言えない『甘い感覚』を彼女に与える。

「どうぞ、ソファに。飲物でも用意しましょう」

「は、はい」

どこか頭がふわふわとした状態で、勧められるがままにソファに腰かける。

「ひゃ……っつ！」

すると、膣内とアナルにねじ込んだ数々の玩具がぐにゅっと内部を刺激して、思わず声が跳ね上がったしまった。

「中のものは一度出した方がいいかもしれませんね」

くすくすと笑う『おじさま』に、かあつと赤面。

「は、はい………出します………んっ………あ………っ！」

それから慌てて玩具に手を伸ばす。

「ふふ、慌てなくていいですよ。そんなに勢いよく出したら痛いでしょう」

「い、いえ、んっ………そんな………あ………こと………な………んっ！ あっ！」
自分の身体の奥深くまで侵入羽しているものを一気に抜き出すと、ぞ

くぞくくぞくと背筋を電流が走り抜けていく。今まで『ありえない』状態で『ありえない』行為をし続けて蓄積された快楽が、一気に開放された様な気分だった。

「は……あ……っ……ああ……っ……」

ぴゅっ、ぴゅっ、と膣口から愛液が噴き出し、ソファを、床を濡らす。

「あ……ごめ……ごめんな……さ……」

ふるふるっと身体を震わせながらそれを止めようとする野分だが、それは無駄な抵抗というものだ。

「気にしないでいいですよ。ここはそのための部屋なんですから」

「そ……の、ため……？」

にこにこ微笑む『おじさま』の声に、絶頂の余韻に浸りつつ首を傾げる。

「あ……」

そして、その言葉の意味をワテンポ遅れて理解し、彼女は更にくぞくくぞくとした甘い痺れに全身を震わせる。

そう、足を踏み入れたときから気づいていた。この部屋の『生活感』のなさを。

『人が生活を送る』ための場所ではないことを、無意識のうちに野分は理解していたのだ。

そして、それはつまり――

改めて室内を見渡すと、この部屋には家具といえるものが殆どない。

今、野分が腰かけているソファと、その前にある小さなテーブル。部屋の奥にあるカウンターキッチンと、そこにある冷蔵庫と食器棚。その他には外国風のデザインの戸棚と、なんだかよく分からない、何本かのパイプを組み合わせたオブジェ。

それが何に使うものなのかは皆目見当もつかなかったが、少なくとも『日常生活』に活用されるものではないということにはわかった。

「どうぞ」

そんな彼女の不安と期待を他所に、目の前のテーブルに一本のペットボトルを置く『おじさま』。

「ミネラルウォーターです。甘いものがよければオレンジジュースとコーラーもありますよ」

「い、いえ、大丈夫です！ あ、ありがとうございます！」

そんな彼の言葉に野分は慌ててペットボトルを手に取りキャップを開けると、迷うことなく口をつける。それは普段から教育されている『危機管理』からするとあり得ない行動だったが、もはや彼女の頭はそんなことを冷静に考えられないほどに混乱し茹で上がっていたのだった。

「さて……」

ゆっくりと野分の正面に腰かけ、ふうっひとつ息をつく『おじさま』。手に持ったグラスに入っている赤い液体はワインだろうか。それをそつと口に寄せ少し口に含むともう一度小さな吐息。

「のあさん……でしたね？」

「は、はいっ……」

「あなたは、何がしてみたいですか？」

「え……」

なんともストレートな言葉だ。あまりに端的で、彼女は一瞬何を問われたのか理解出来なかった。

「動画……あなたが見た動画の中で、気に入った行為はなんですか？」

「あ……」

だが、次の瞬間その言葉の意味を察した彼女は、再びかあつと顔が熱

くなるのを感じ、ミネラルウォーターをぐくぐくと喉を鳴らして一気に呑み下す。

始まっている。

そう、もう、始まっているのだ。きつと、この部屋に足を踏み入れた瞬間から。

「え……と……」

『おじさま』は優しい微笑みを浮かべながら野分を見つめている。その視線はどこまで穏やかだが、同時に彼女の心の奥底までを見通すかのように鋭い。

(だめ……この目で見つめられたら……)

逃げられない。いや、そもそも飛び込んだきたのは自分だ。だから今さらどうすることもできない。彼女はただ、『おじさま』に尋ねられるがままに……。

「あ、あの……縛られて……動けなくされたのが……」

「ああ、なるほど。それでは、緊縛体験といきましょうか」

野分の口からその言葉が発せられたのに満足そうに微笑むと、彼は傍らから一本の縄を取り出し、見せつけるようにテーブルの上に置いた。

「さあ、手を出して」

「は……い……」

どくん、どくん、心臓が高鳴る。喉が渇いてぐくぐんと唾を飲み込むと、自分でも驚いてしまうほどの音が響く。

そして『おじさま』は、揃えて前に出された手首に、しゅるしゅると手際よく縄を巻き付けきゅつと結んだ。

「どうですか？」

「……」

瞬間、野分が感じたのは興奮ではなかった。つい一秒前まで感じていた胸の高鳴りは急速に萎んでしまった。

(……あれ？)

その代わり、彼女が得た感情は――

(違う……)

拍子抜け。あるいは肩透かしと言え方がいいのだろうか？ 動画を見ていた時に感じたドキドキは、その行為にはなかった。

(こんなの、ちよつと力を入れたら千切れちゃう……)

こんなにも頼りない拘束は拘束とはいえない。

それは彼女に不安を――そしてそれに伴う甘い刺激はげを与えてはくれない。

そんなことを考えた時のことだった。

「艦娘の君には少々もの足りないかな？」

「……!」

刹那、野分は一步後ろに後ずさり、殆ど裸の無防備な状態で臨戦態勢に移行した。

「まあまあ、落ちついて」

だが、あいも変わらず余裕の表情の『おじさま』。

彼はなだめるように優しく、穏やかな言葉を紡いでいく。

「わたしは今民間人だけどね、昔は軍に所属していたこともあるんだ。だから、色々とかかっているつもりだよ」

「何を……ですか……?」

「艦娘のお嬢さんたちが心に抱えている闇……いや、よむ涙みと言うべきだろうか」

頭の中では緊急事態の警報アラートが鳴り響いていた。これは危険なものだと、

艦娘の本能が訴えかけていた。

だが、同時にその張り詰めた心を溶かすように『おじさま』の声は野分の本質にダイレクトに響いた。

じわりじわりと染み入る静かな声。優しく、穏やかな口調。それはまるで媚毒のように甘い、甘い――

「君のような艦娘はよくいるんだよ。戦いの中、自分の生きているという証明を強い感情に求める子たち……それは、ごくごく自然なことなんだよ」

普段の野分であれば、きつとこんな事はなかった。教育や訓練によって身体と心に染みついた直感に従っていただろう。

「例えば快感、例えば羞恥、例えば痛み、拘束感……。君はどれかな？」

だが、今この時点においてはそれよりも好奇心が勝った。気がつけば彼女の心の中の警報は鳴り止み、『話を聞いてもいいかな？』なんて思いを抱いてしまっていた。

「でも、艦娘は強いからね。拘束されてもそう簡単に制圧されることはないし、強烈な痛みだって耐えられてしまう。快感を増幅するような薬にも耐性がある――そこで、これだ」

「くす……り……？」

「これはね、艦娘が退役するときに服用する薬だよ。簡単にいうと艦娘を人間にする薬……かな」

そう言いつつ示したのは、大きな『おじさま』の手のひらの上にあるとあまりに頼りなく感じる、吹けばどこかに飛んでいってしまいそうな小さな錠剤。

「実際に退役する際はこれを複数回に分けて服用し、それと併せてインターフェースの除去手術をするのですが、この薬だけを飲むと一時的に

艦娘ではなく人間の身体になってしまうのです」

そういった薬物を使った火遊び^{いたずら}のことは野分も聞いたことがあった。度が過ぎてしばらく出撃出来なくなった者がいたり、退役する羽目になった者がいたということも。

嚴重な管理をされているはずのその薬物は、ちょっとした伝手があれば手に入れる事はそこまで難しくないらしく、他の鎮守府に在籍する艦娘にそれとなく勧められたこともあったが、その時の野分は何を言われているのがよくわからず、後になってようやく気がついた、なんてこともあった。

「どうだい？ 試しに飲んでみないかい？」

「え……？」

だが、今回はそんな『遠回り』な言葉ではない。あまりにも単刀直入な、誤解も何もしようがない一言。

「ああ、大丈夫。多用しない限り害はないよ。失われた艦娘の機能も、1日……遅くとも2日のうちには快復する」

そう。実際『嚴重な管理』をされているという割に、この薬物の効果はそれほど高いというわけではないらしい。そして恐らくそれが故に『伝手』を使えば比較的簡単に手に入れる事ができる。気をつけなければいけないのはあくまで常用化し、依存するようになってしまうこと――

それでもきつと、普段の野分であれば即答していたことだろう。

『そんな危険な遊びをするつもりはありません』

相手の目を真っ直ぐに見つめ、断言しただろう。

だが、この瞬間、野分は迷った。

惑い、悩み、逡巡してしまった。

「……」

そんな野分に『おじさま』は、ただ優しい視線を向けていた。彼女の背中を押すこともなければ言葉を弄することもなく、静かに少女の決断を待っていた。

——それは、野分にとっては永遠にも感じられる一瞬だった。

『おじさま』の言葉は彼女の心の障壁にじわりと浸透し、染み入っていた。

彼がただ静かに野分を見つめている間も、その声は作用していた。コップの水に落ちた一滴の澱みは、時間をかけてゆっくりと全てを染め上げていった。

——だが、実際にはそれは、ほんの数秒に過ぎない瞬間だった。

「……ます」

「うん？」

「お葉……飲み、ます」

彼女はちいさく、本当にちいさく、そう呟くに至った。

「大丈夫だよ。心配することはない。みんなしていることなんだから」

みんなとは誰だろう？ 見も知らぬ、会ったこともない他所の鎮守府の艦娘？ それとも、直属の上官に当たる那珂？ 嵐や萩風？ いつも明るくて天真爛漫な舞風も……？

「それじゃあ、私が飲ませてあげよう。ほら、口を開けて？ 舌を突きだして」

一瞬の躊躇の後、言われるがままに舌を出す。すると、その上に鋭利

がそっと置かれた。

「呑み込んではいけないよ？ のど飴をなめるように、じつくりと口の中で溶かすんだ」

「は……い……」

言われるがままに口の中に含み、舌先で弄ぶ。

ころころとした感触が少しくずくたたくてついつい噛み砕きそうになつてしまいが、真面目な野分は『おじさま』の言いつけを破ることなどしない。

「さて、それじゃあ改めて縛ってみよう」

「え……？ あ……っ」

野分のほっそりとした手首を手に取り、くるくると縄を巻き付けていく。

「床に膝をついて。そうそう。手も、うん、そうだ」

言われるがままに膝と手をつくど、下腹部にぐいっと押し付けるようにして縄を足首にまで伸ばしていった。

「膝から下を上げられるかな？ そう、うん、いい子ですね」

更に足首に縄を巻き付ける。そして今度は首輪についたDカンを経由させ、ぐいっと強く引き絞る。

「あっ……！ ぐっ……！」

「ああ、すまないね。このままじゃ首が苦しいね。だから、もう少し足を上げて……そう、うん、これなら苦しくないだろう？」

言われるがままにしていると気がつけば、手首、足首を完全に固定されてしまっていた。

くいつ、くいつと弄ぶように縄を引かれて、その度に割れ目とその中に隠されたクリトリスを擦られた。特別強い刺激というわけではなかつ

たが、むしろその塩梅が焦らされているようで、お腹の奥がむずむずと疼いてしまった。

「さて、これでお終いにするよ。少し身体の力を抜いて？」

「は……いつ……えっ!？」

瞬間、お尻の穴に感じる異物感。

「な、なにを……!」

「ちようどいいから使わせて貰うよ」

それは、ついさっきまで野分が自分自身に使っていたアナルフック。

自分で使っていたときと違い、挿入するだけでなくしつかりと食い込むまで引き上げられて、彼女はより強い圧迫感を覚える。

「これを縄の端に繋ぐと……」

「いつ……! た……っ!」

「ほら、手首、アソコ、足首、首、お尻……全部がぴんつと繋がって、身動きが取れなくなっただね」

「あ……ああ……あ……」

先ほど感じた、『縄に対しての頼りなさ』はもう感じなかった。

この姿勢で身体の動きを完全に封じられて、ここから力尽くで抜け出すイメージがわからなかった。

「クスリはもう溶けたかな? どうだい? なにか変化はあるかい?」

「へん……か……?」

そう言われて、なんだかふわっと身体が浮き上がるような感覚を認知する。

視界がぐるぐるっと回り、きいいんつと耳鳴りが聞こえてくる。

「あ……ああ……あ……うで……んっ……あし……っ……う、動かない

……動かせない……んひっ!」

ふらつと横に倒れそうになって、引き攣れるような痛みをお尻の穴に感じた。

「おっと。アナルフックががっちりとお尻の穴に引っ掛かっているからね。じつとしていないと痛いよ?」

「はあ……はあ……はあ……」

内側をがっちりと挟まれて、強い異物感があった。

「あ……ああ……ああ……おし……りっ……ずくずく……っ……して……っ!」

だけどその異物感は、同時にジンジンとした疼き、ゾクゾクとした甘い感覚を野分に伝えて来た。

「おやおや、すっかり発情してしまっているね」

「え……?」

「気づいていないのかい? 君は今、一生懸命股間を縄に擦りつけているじゃないか」

「あ……? ああ……うっ……あっ……あううっ……」

知らずのうち、野分は腰をへこへことみつともなく揺すっていた。

そのせいで縄は割れ目に強く食い込みクリトリスや膣口を刺激して、ぼたっ、ぼたつと愛蜜を滴らせていた。

「どうかな? 気持ちいいかな?」

「き……もちっ……いい……っ……きもち……いつ……あ……!」

「どこがどう気持ちいいのですか?」

「あ、アソコ……んっ……アソコお……じんっじんって、じんじんってして……」

「はて、アソコってどこでしょう?」

「お……まんこ……あっ! おまんこですうう……っ!」

卑猥な言葉を口にすると、更に快楽は増した。恥ずかしさに身体の芯がかつと熱くなり、熱くなつた身体は更に刺激を求めた。

「おまんこだけではありませんよね？」

「お……おしりっ！ おしりもっ！ ぐりぐりっ！ あっ！ これっ

……！ 気持ち……っ！」

股縄を擦りつけようと足首を動かすと、首輪が引っぱられて首が絞まる。その苦しさから逃れようと首を動かせば、アナルに突き入れられたフックが内側をぐりぐりと刺激する。

「痛くはないのですか？」

「い、痛い……っ……痛い、ですけど……ふあ……っ！ きもち……いつ……ひっ……あ……っ！」

「なるほど、痛いのが気持ちいいのですね」

「あ……ああっ……わかつ……わから……っなっ……！」

「だって、お尻は痛みを感じるのに、そんなにも身体を揺すつてしまうのでしょうか？」

ぴちゃっ、ぴちゃっと滴る蜜は、気がつけば縄をべつとりと濡らしていた。そこから糸を引くように落ちて、床を汚していた。

「わ……っ……わから……な……っ！ ふあっ！ ああっ！ あああっっ！」

ギリギリと、尻穴をに食いこみ押し抜けるフックにゾクゾクとした。

「あっ……！ ああ……くる……しっ……！」

ぎゅうつと、首輪が喉に食い込んで、くらくらとした。

「ふふ、ツンつと尖った乳首が可愛らしいですね」

「いっ……！ ぎいいいっ！」

ぎゅつと指先で摘まみ、すり潰すように乳首を捏ねられると、頭の中

がチカチカッと明滅した。

痛い。

苦しい。

もどかしい。

そして——気持ちいい。

全ての感覚がリンクしていく。

全ての刺激が脳に届く頃には甘く、ねっとりとした快楽に変換されていく。

「んっ！ んううっ！ きもち……っ！ いっ！ ですっっ！」

口の中で溶けきつたクスリは全身に浸透し、少女をずくずくの骨抜きにしていった。

足の動きが速くなる。

腰の動きがより淫らになる。

「んあっっ！」

ゾクゾクと背筋が震えた。

「ひっ！ いっ！ いあっっ！」

びくんびくんと身体が跳ねた。

「イクのですか？ いいですよ。思う存分イけばいい。ただし……ちゃんと申告してからね」

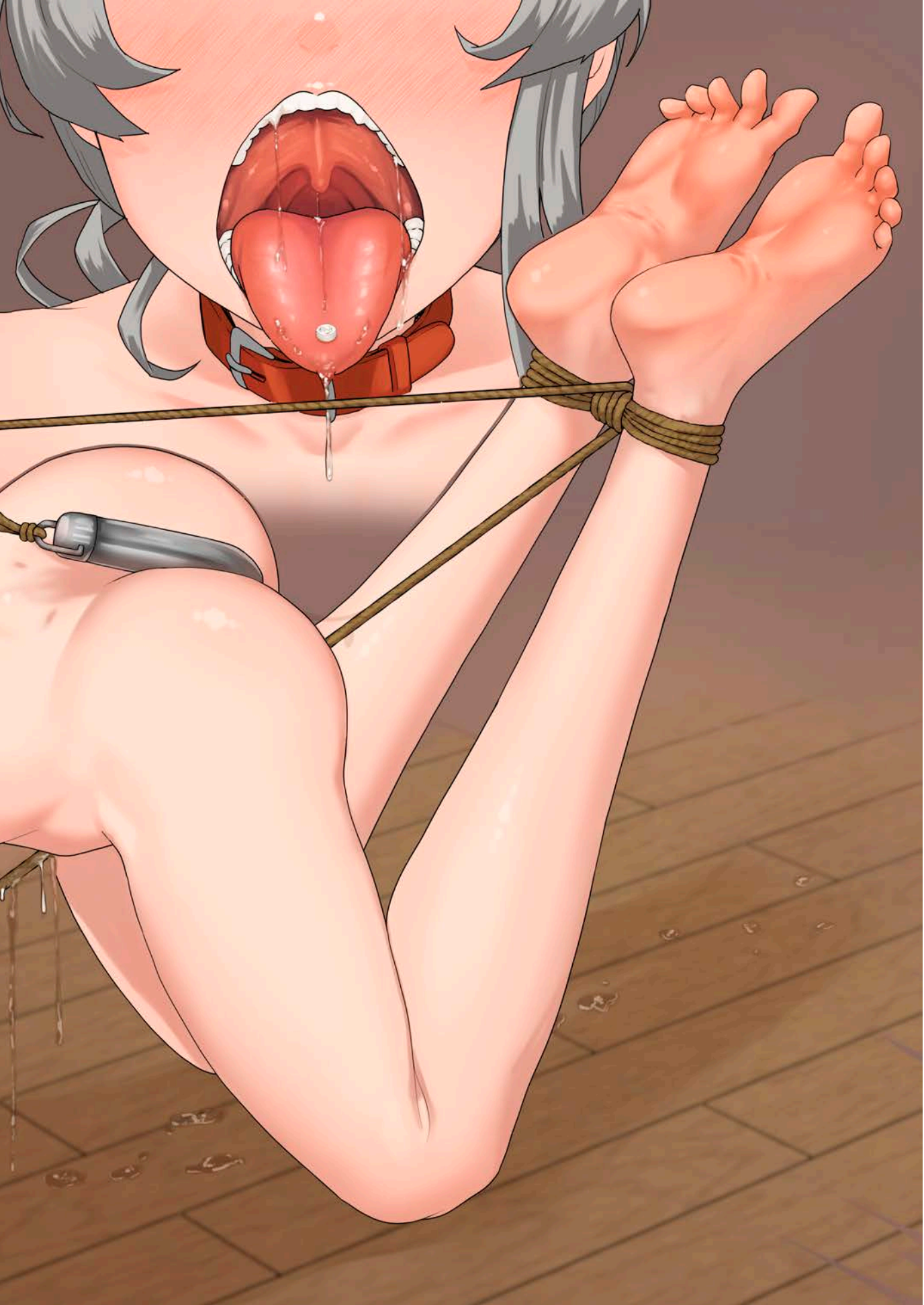
それに合わせて『おじさま』は、摘まんだ乳首を捻り潰すようにつね

りあげて——

「いっ……ク！ イクっっ！ わたし……っ！ イキ……つまっすっっ！」

少女の白い喉が反り返った。

「イっっ！ くっっ！ イキゅうううううんっっ!!」





そしてそのまま背骨が折れてしまうのではないかというほどに激しく身体を痙攣させて――

「……っ！」

がくんと、全身の力が抜ける。

「あ……っ……ああっ……あ……うつ……」

そのまま床に崩れ落ち、びくんと、びくんと余韻にふける。

「ふふ……上手にイケましたね」

そんな彼女の頭を優しく撫でて――

『おじさま』は、優しくそう囁いた。